

日14-89 (ショートコメント)

「蝸ノ記 (ひぐらしのき)」 ★★★

2014 (平成26) 年7月16日鑑

賞<東宝試写室>

監督・脚本：小泉堯史

脚本：古田求

原作：葉室麟『蝸ノ記』(祥伝社刊)

戸田秋谷(10年後の夏に切腹を命じられた羽根藩の元郡奉行) / 役所広司

檀野庄三郎(見張り役) / 岡田准一

戸田薫(秋谷の娘、庄三郎の恋人) / 堀北真希

戸田織江(秋谷の妻) / 原田美枝子

戸田郁太郎(秋谷の息子) / 吉田晴登

お由の方(三浦兼通の側室の一人、松吟尼) / 寺島しのぶ

中根兵右衛門(羽根藩家老、庄三郎に秋谷の監視を命じた) / 串田和美

源吉(農民の子、郁太郎の親友) / 中野澤

2014年・日本映画・129分

配給/東宝

◆本作を監督した小泉堯史は、黒澤明監督に師事し、そのさまざまな手法を受け継いだことで有名。私は、初監督を務めた『雨あがる』(00年)と、2作目の『阿弥陀堂だより』(02年)は観ていないが、『博士の愛した数式』(06年)

(『シネマルーム10』177頁参照)と『明日への遺言』(08年)(『シネマルーム18』243頁参照)は興味深かった。『キネマ旬報』2014年8月上旬号でも短期連載として「蝸ノ記 小泉組ノ記 第一回」が掲載されており、さまざまな取材がされているが、これは小泉堯史監督のネームバリューの他、役所広司と岡田准一というビッグネームを起用したおかげだろう。

小泉堯史監督流の美しい風景と芸達者な俳優による美しい所作、そして、シンプルでわかりやすいストーリーが本作の特徴だが、逆にストーリー展開の面白味に欠けるのが難点。山本周五郎の歴史小説『樅ノ木は残った』は、仙台藩伊達家で起こった「伊達騒動」というかなりスリリングでミステリアスなストーリー展開が魅力だが、葉室麟原作の本作は、郡奉行の身で、側室と不義密通し小姓を斬り捨てるという前代未聞の事件を起こした罪で10年後の夏に切腹すること、また、その切腹の日までに藩の歴史である「家譜」を編纂し、完成させることを命ぜられた戸田秋谷(役所広司)という設定が、よくも悪くも物語の核。もちろん、役所広司は戸田秋谷役を立派に演じているが、弁護士の私の目にはちょっとキレイごと過ぎ……。

◆去る5月12日に観た、中島哲也監督の『濁き。』(14年)では、いい年をして常軌を逸する行動に走る元刑事役を演じて、新境地を開いた(?)役所広司が、本作では小泉堯史監督の指示に従って(?)、あくまでオーソックスに戸田秋谷役を演じている。他方、NHK大河ドラマ『軍師官兵衛』で近時かなりクセのある黒田官兵衛役が板についてきたV6の岡田准一が、本作では羽根藩の家老・中根兵右衛門(串田和美)から秋谷の監視役を命じられながら、日常的に秋谷と接する中で次第に秋谷を尊敬し、秋谷に共感していく若侍・檀野庄三郎役を演じている。しかし、これも純真といえば純真だが、単純といえば単純。

秋谷の妻・織江(原田美枝子)もとにかく模範的な妻だし、娘の薫(堀北真希)も予定調和的に庄三郎と結ばれることになるから、とにかく本作には意外性が全く無い。もちろん、10年後に切腹を命じられ、今それが3年後に迫っていても、「家譜」の作成という任務を粛々と務めている男・秋谷というのが本作のテーマだから、途中で逃げ出してしまえばストーリーが成り立たないことはわかるが、それでもどこかに、何かのヒネリが欲しい。そう思ったのは私だけ……?

◆今日ほど情報化が進んだ社会でも、公開の裁判ですべての真相が明らかになるかといえばそうでもない。例えば、オウム真理教の麻原彰晃被告は法廷でも黙秘を貫いたから、真相はわからないままだ。しかして、本作でも秋谷のような立派な男が今から7年前に羽根藩の藩主・三浦兼通の側室であるお由の方(寺島しのぶ)とホントに不義密通を……?

そんな罪で10年後の切腹を命じられれば普通、秋谷の妻・織江は半狂乱になるものだが、本作を観ていると織江の秋谷に対する信頼はゆるぎないし、年頃で潔癖なはずの娘・薫も父親への信頼は厚い。したがって、秋谷の監視役を命じられた庄三郎が、秋谷が切腹を命じられた罪は冤罪ではないかと疑ったのは当然。そして今、秋谷が命じられている作業は家譜編纂だから、それをやるためには新聞記者のような取材が不可欠。そこで、庄三郎が秋谷の監視役を通り越して、死刑判決の起訴事実について真相解明のための調査を進めてみると……。ここらあたりの調査がお由の方とのやりとりで一発でわかってしまうストーリー構成はちょっと単純すぎるが、小泉監督流でいけば、これも日本的な様式美……?

◆士農工商という身分差別がハッキリしていた江戸時代では、悪代官と結託した商人(あるいは金貸し)による悪業というストーリーがよく登場するが、羽根藩でもそんな構図はあるようだ。家譜の編纂にいそんでいる秋谷だが、地元の農民たちの信奉が厚いため、秋谷の屋敷が農民たちの「集會」の場如果使用されれば、何かと疑われるのは仕方ない。もちろん、当の秋谷はそんなことはおかまいなしに農民たちとの接触を続けていたが、コトが少しずつややくしくなり始めると……。

本作では秋谷の長男の郁太郎(吉田晴登)と、その同級生(?)である農民の子・源吉(中野澤)が、中盤ストーリー展開で大きな役割を担うことになる。さて、農民たちの「一揆騒動」に絡んで源吉のうえにはいかなる災難が……? また、それに義憤を感じた郁太郎は、羽根藩の家老・中根兵右衛門に対していかなる行動を……? 役所広司と岡田准一はさすがの芸達者ぶりをみせるが、2人の子役・吉田晴登、中野澤になると、その演技は少し学芸会気味……?

◆藩政の実権を握る「家老」という役職は非常に重要だが、そんな家老には、自ら方針を立てて動く「信長タイプ」と、状況に応じて対応していく「秀吉タイプ」の2通りがある。本作でストーリー形成のうえで大きな役割を果たす三浦家の家老・中根兵右衛門は後者のタイプらしい。

秋谷の監視のために庄三郎を送り込むという策も、突発的なこととはいえ、殿中で刀を抜き、同僚に重傷を負わせてしまったため、本来なら庄三郎に切腹を命じなければならないところを、うまくごまかしたもの。ところが、その庄三郎が任務を忠実に果たさず、逆に秋谷の魅力に取り込まれているらしいという報告を聞いても、何ら有効な手を打たないのは優柔不断と言わざるをえない。しかして、郁太郎が庄三郎と共に乗り込んできた時、中根兵右衛門はいかなる対応を? さらに、どうせ近々切腹するのだからと腹をくくっている(?)秋谷が最後の最後に中根兵右衛門に対して大芝居をうつと、それに対して中根兵右衛門はいかなる対応を?

まあ、こんな「働きかけ」によって羽根藩は善政に戻ることができたのだから、結果オーライと言えはそれとおりで、私にはこのような展開はちょっと腑に落ちない。そして、何といても本作のハイライトは日本の様式美に則った秋谷の切腹だが、さてそのシーンは……?

201

4 (平成26) 年7月25日記